

第7回「まちづくりに関する提案」

まちづくりっていい？

10年ほど前の事である。私はある会社で、まちづくりに関する仕事に一度だけ関わった事がある。

このとき、住民アンケートを取ったのだが、アンケート結果を整理していくうちに、私は住民の皆さんの要望が、大規模な街の改造（たとえば、新規道路の建設）ではなく、もっと小規模で、質素なものなのだという事に気づかされた。

駅からの帰路にある田んぼ道に街灯がなく、不安なので、街灯をつけて欲しい。歩道をもう少し広くして欲しい、等。そこで、私は発注者に対し、街灯の増設 農地沿いの道では街灯の光が届く範囲は作物が徒長し、実がならないため、検討



近くに大きな病院があり、小中学校の通学路でもある区間に残るマウントアップ形式の歩道



セミフラット方式の歩道



長い間舗装のいたみを何年も放置してある道路

が必要だと考えていたが、歩道の改良 歩道の拡幅は土地買収が発生するため、歩道のマウントアップ形式区間をセミフラット方式に改良することを提案しようとしていた。しかし、社長や技術士の方に「夢がない」と一刀両断されてしまった。財政難の時代に巨額の金を投入し、長期にわたる大規模な工事を行い、街を大きく変えていくだけが「夢のある」まちづくりなのだろうか？

毎日使っものだから

私はいまだにあの時の事が納得いかないでいる。歩道の一般的構造に関する基準」が改正されて、マウントアップ形式歩道のフラット・セミフラット形式化はいくらか進んでいるように感じはするが、財政難の地方ではまだ歩道の整備が手付かずの所も多いように思う。

また、道路に発生する亀裂や陥没、アスファルトの剥がれなどを長年放置したままにしてある所を見ることがある。まだあと数年はそのままでいいのではないかと思われるアスファルト舗装道路がハツられ、新しいアスファルトが敷かれるのだ。道路管理者がどこか（国県市町村）、つまり、予算規模の違いが理由として考えられるが、国民にとっては効率の悪さ（税金の無駄使い）を思わずにいられないのである。

歩道における植樹帯の管理

学生のころ、講義でドイツでは家の前の植樹帯はそこに住む人が手入れをしていると聞かされたことがある。日本でも最近では市民の皆さんがボランティアで花を植えたり草をむしったりしているところをよく見かけるようになった。車道の中央分離帯の植樹帯は危険なので、業者に任せべきだが、非常に喜ばしい傾向であると思う。また、植樹帯の主となる樹木の周りにシロツメツユクサ クローバ、ヒメイワダレ草など地面を覆うように増える種類の草花を植えると雑草が抑制され、見た目もすっきりするので、ぜひ取り入れて欲しいものである。これにより植樹帯の管理費が少し軽減されるはずである。

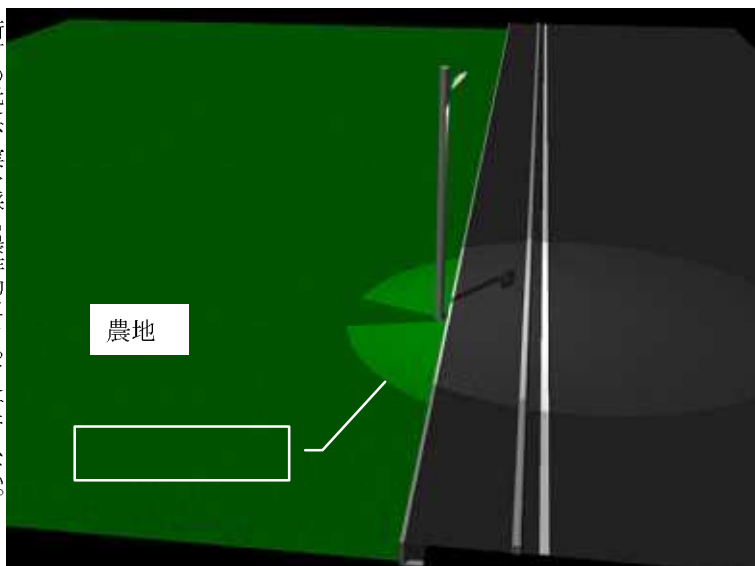


背丈が低く、地面を覆う草花を植えているために雑草がなく見た目が綺麗。

ひかりの功罪

田畑に面した道路を車で走っていると、街路灯の設置してある付近の作物が徒長している事気がつく。実を収穫するタイプの作物 イネ、ム

ギ、ダイズなど）は夜がないと背丈が高くなるばかりで実はほとんど実らない。この問題は多くの人の知るところであろうが、対策を講じている所は皆無であると思われる。つまり、農業関係者の泣き寝入りというのが現状ではないだろうか。



人の安全と農作物を天秤にかければ、人の安全が

優先されるのは当然であろうが、街灯の笠の形状を工夫するとか、遮光壁を作るとか、少しは農業関係者に配慮して欲しいものだと考えるのである。

（徒長・作物の茎や枝が無駄に伸びてしまう現象）

小さな幸せを多くの人に

冒頭でも触れたが、まちづくりはなにも大きな変化を遂げることだけが目的ではない。長期的な視点に立って、まちを大きく変えていくのにも必要な場合はあるだろうが、その効果は計画立案後、十年後、二十年後にしか現れない。それより、その街に暮らす人たちの多くは、二、三年後の小さな幸せを望んでいるのではないだろうか。

行政もコンサルタントも財布の中身を直視し、少ないなりに有効な使い方を考え、実行して欲しいものである。